市民プレス

平成30年
(2018年)
1月5日
第79号

発行人 「市民フォーラム」
編集人 原 昭二
制 作 デジタル工房
TEL 090(3048)5502
〒353-0004
埼玉県志木市本町 2-4-43

E-mail
hara@camelianet.com

SHIMIN PRESS

市民の目線で市民が発信する地域情報紙
WEB SHIMIN
http://shimin.camelianet.com

「市民プレス」電子版（無料）を公開しました
http://pr-shimin.camelianet.com
電子書籍専用のアプリケーション等でお読み下さい。

CONTENTS

-PAGE 1
詩画集『また春の日に』 原 貝次郎著
二科会々員で、恩師の斉藤三郎は述べている…
無類の善人で、繊細な感覚の持主だった。
新聞、雑誌、タウン誌に「カット」を描く
-PAGE 2
画家の貝次郎は、さらに、詩人としてスタートし、成長してゆく。
貝次郎の詩は「かいじろうの家」で作られた…
-PAGE 3
「対掌性」を認識した古代の日本人！
「対掌性」とは・・・　弓矢と矢羽の話
「羽状縄文土器」　蓮田市内の貝塚群
「キラリティ」chiraliy
-PAGE 4
渦と螺旋　二本の紐のモデル
Z撚り、S撚り　黒浜土器

詩画集 また春の日に

原 貝次郎著

アヴァンギャルドの画家が、ノート一杯に書き綴った詩と、油絵具に塗れたキャンバスの絵を見据えて編集され、『かいじろう作品保存会』から発行された。フルカラー、A5横サイズ特製、百八十二頁、発売は揺籃社。

貝次郎の作品として、多くの詩、そして絵の一つ一つに魅せられ、愛好して止まない人たちは、作品の保存に努め、何時の日か公けにすることを念じてきた。編集に携わった同会のメンバーは、生前、彼が自ら記したメモ書きを隈なく確かめ、彼の意向を慮りながら、詩・画の作品を選抜し、年代を追って配列する作業に取り組んだ。

＊　＊　＊

『原貝次郎』は本名：原　武。詩作に耽ったころは、「かいじろう」と記していた。昭和七年（1932）に生まれ、高校生の頃、音楽、美術に興味を持って、ヴァイオリンの演奏と油絵に傾倒した。

しかし、大学に進学して間もなく病いで倒れ、入院、手術後、二科会々員斉藤三郎氏に師事して油彩を学ぶ。二科展に三年連続入選したが、再び病床に臥し、快方に向かうこと無く、昭和三十七年一月永眠した。行年二十九才。

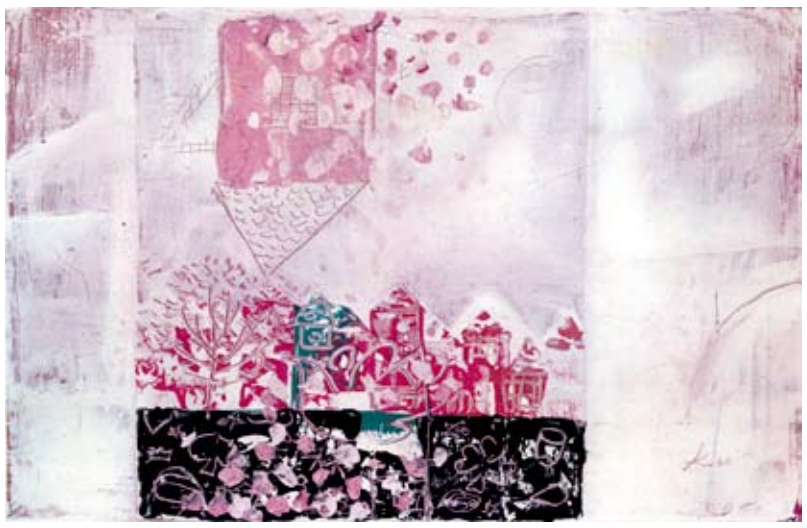
貝次郎は、昭和二十九年ころから詩を書き始め、余白にはメモやカット風のデッサンが記入されている。

詩を書き残す動機となったのは、銀座の洋菓子店「ウェスト」が発行していたタウン誌に応募して、何度も掲載されたことのようだ。当時の選者は「深尾須磨子」さん。詩人、作家、翻訳家として著名、フランスに渡り、平和運動家としても知られる方だった。

早世した貝次郎が残した絵画と詩文には、彼の優しいこころが漂い、また謳われている。

＊　＊　＊

それから半世紀を経た時代のいま、科学技術、社会・生活環境は革新され、世界は激烈な変動を繰り返す。人々は好むと好まざるに拘らず、慌ただしい日々を送り、それに耐えて暮らさざるを得ない。だから、いまこそ、こころに響くもの、そして優しさが求められているのではなかろうか。



春の風景　1960年　油彩

「かいじろう作品保存会」は、出版にさいして、この書を手にした読者が、彼の作品の一つ一つを鑑賞して、貝次郎の天性だった、無類の優しさに共鳴されんことを願っている。

二科会々員で、彼の恩師に当たる斉藤三郎は次のように述べている（昭和三十八年）。

「亡くなってから約一年経った。印象に残っているものを探ってみよう。彼は・・・

一。長身の美青年だった。

五年前初めて逢った時は、GI刈りがよく似合った。

二。無類の善人で、繊細な感覚の持主。

三。彼の生涯は、ピンクカラー。以上のことが、はっきりと蘇ってくる。

繊細と正直な性格は、その儘作品に示され、特に結婚前後に最高度に　甘いピンクを駆使した。

画は、甘くても結構だし、それなりに厳しさを加えて行けばいいわけだ。まして難しい顔をして流行を追って、本人のものならいざ知らず、模倣や思いつきの様な前衛絵画に憂き身をやつす必要はない。そんな画の多い時代に、正直な彼の作品には大変好感がもてた」。

勿論、まだ画業の浅い彼の仕事には、力強さなどの不足による欠陥もあったことは当然だけれども、反面、作者の醸しだす高調した情景は、白日の妖しさとでもいおうか、やはりこれも立派な近代的感覚の持主の作品といえよう。

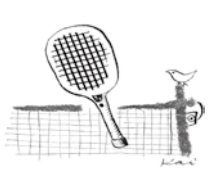
前衛美術の著名な評論家として知られていた植村鷹千代は述べている（昭和三十八年）。

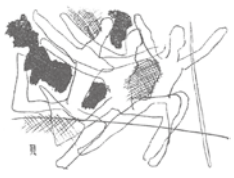
「原貝次郎という青年芸術家も、その作品も、今日の現実を考え合わせてみると、得難い存在であったことがわかる。芸術も生活もトゲトゲしく粗暴になりがちな今日、あまりにもロマンチック、あまりにも詩的だと人はいうかもしれないが、それだけ彼と彼の芸術の存在は異色で貴重であるといえるのである。芸術の本質は魅力にあるが、純粋な自由、純粋な素直さは、芸術の魅力の本質につながる。原君の絵はそういう魅力をもっているからである」。

小さい挿絵

原 貝次郎は、新聞、雑誌、タウン誌などから依頼されて、「カット」を描いた。右下の二つのカットは、スポーツ、テニスがテーマ

左の詩とカットの組合わせは、天麩羅友の会発行：「てんぷら」第五号に掲載。昭和三十四年（1959）





春

原 貝次郎

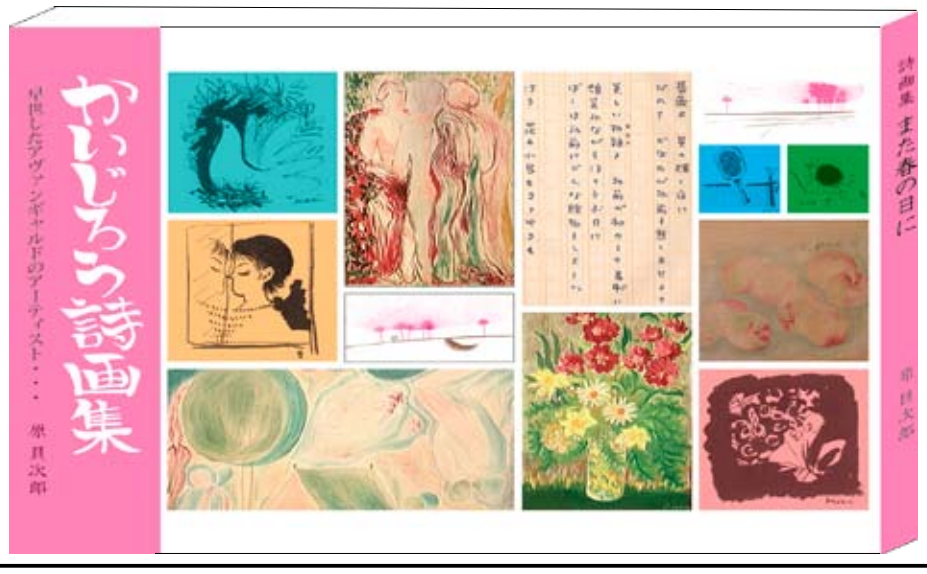
春の電車に
窓から愛が
とんでくる

暖い小春日だ
みんな青く生えそろった
畠の麦の穂たち

ねむけたげな休止符から
目覚めていった人たち
今はどうしているか
花の香がもうすぐに

いっぱいにただよっている
のどかな勾配の丘
明るい車内　スカートの前を
ちょっと開げて少女が一人立っている

リンゴとヴァイオリン
1957年



懐かしい詩を読む、そして絵画を見詰めると、明るいミュージックとメロディーが突然、流れ出す・・・・そんな本をつくりました！
詩画集
また春の日に
原貝次郎（画家・詩人）
A5横サイズ　182Pフルカラー　並製本　定価2800円＋税
ISBN978-4-89708-363-4
揺籃社
八王子市追分町10-4-101
TEL：042-620-2615　FAX：620-2616

画家の貝次郎は、さらに、詩人としてスタートし、成長してゆく。

詩の成長も人のそれと同様だ。内なるものをその儘、文字にするそれが幼年時代であり、それに妙に反撥の態度をとるのが少年時代であり、そのふたつの時代を経て再び新しい浄化されたMärchenを求めるのが青春時代であるのなら、その芽生がこの中のどこかに或ひは始まっていてくれるかもしれない。そして屹度そうあってくれればよいが、などと思ひながら随分遅れてしまったけれど、まとめてみた。古きを消化しより新しきStepの為に・・・・・。

八月三日　一九五三年

貝次郎詩集の始めに

たぶんね

たぶんね
たぶんね

ゆっくりと
ゆっくりと

春がね
どこかでね
黒い土の下

どこかでね
春がね

ゆっくりと
ゆっくりと

たぶんね
たぶんね

耳飾り

ゆれるゆれる
耳飾りがゆれる
風もないのに

だあれもそばに居ないのに
優しいことを想っている

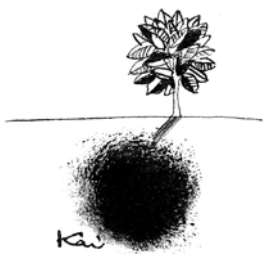
耳飾りが一人でゆっくり
ゆれている

また春の日に

小鳥たち　木々にさえづり
花は咲き　春はきたれり
しかしまた　何(なぜ)の春なり

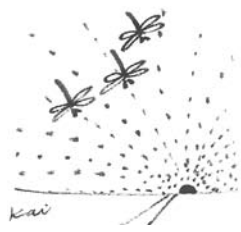
若芽たち　緑にけぶり
風よ吹け　春はきたれり
しかしまた　何(なぜ)の春なり
だれとしもなく　なにもなく
小鳥たち群れ　花は咲き
若芽たち　風よ吹け！

しかしまた春よいづこに
ああ春らんまん　ひそひそと
さくら花　咲きて散りゆく



春山の歌

春山を呼ぶと
こだまは　泣きながらまた帰る
なぜ泣きながら帰ってきたの
と尋ねると
だってあなたは無理なこと
おっしゃるんですもの
と眼を俯せる
だからぼくが春山を呼ぶと
こだまは　泣きながらまた帰る



貝次郎は自らを戒めつつ、大学ノートに誌した詩文の編集を仕上げた「貝次郎詩集」を完結する・・・

・・・はて詩とは一体何んなのだ
自信を持ちたまえ、午前の時間に
居て、午后の結実の確信を抱きた
まえ

一九五七年・春より夏まで、
八月九日、昼。

エピローグ

原　貝次郎

・・・・・美しい結末でありたい
ものと、精一杯のやせがまん、小
さいものが育ってゆきながら、そ
れはまた離れてゆくことであっ
た。ひとつの初めからはてまでの、
それはこれわずかの花びらとの愛
の、楽しかりし音楽の言葉の文字、
そうでなかった故にそうあったら
の幸ひに酔ひしれる、これはそれ
詩の悲しみと本質か・・・・・

一九六〇年　詩集の終わりに

かいじろうは、亡くなる前、母校の志木市立志木小学校で小学生に図工を教えた。そのとき指導を受けた関根伸夫は、かいじろうに示唆されて前衛芸術家を目指した。関根は川越高校を卒業して美術大学に進んだ。

「環境美術」を標榜する関根伸夫は、独創的な野外のモニュメントを制作・展示して、国際的な評価を得る。彼は、東京都庁舎シティーホール前の『水の神殿』をはじめ、国内外で、多くのモニュメントやプロジェクトを遂行した。「環境美術研究所」を設立、多摩美術大学環境デザイン科の客員教授をつとめる。

「かいじろうの家」は・・・

貝次郎の活発な藝術活動は、主に生家の一角に佇む「離れ家」で行なわれた。平成十五年、国の「登録有形文化財」に「朝日屋原薬局」が登録され、離れは、当時とほとんど変わらぬ姿で現存している。

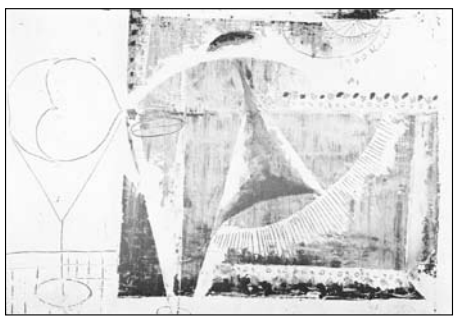
なお、かいじろうをアーティストに育てたのは・・・

義兄の小谷野元七、登世夫妻である。小谷野家は、浦和（現・さいたま市）の資産家として知られ、知識人との広い交友をベースとして、二科会員、斉藤三郎を選び、その指導を仰ぐことを薦めた。

登世は、かいじろうの長姉で、彼の看護と、作品の保存に当った。本書の主な原資料（絵画の一部、カットなど）が、今日まで維持されたのは、一重に彼女の努力による。

武蔵野の町　F15号　1956

しかも、自らは染織家として研鑽に励み、雅号を「梢美」と称して数多の作品を発表し、著書（『染の旅』）を公刊した。



メロディー　1960

かいじろうの家で・・・

平成十五年七月、「朝日屋原薬局」が、有形文化財（建造物、七件）として文化庁に登録される。「かいじろうの家」はその一つ、

＝数寄屋造りの「離れ」＝

定理

痛い所があったら
それは棘(とげ)
落ちた所があったら
それは莟
柔い所があったら
それは花瓣

痛い所と
落ちた所と
柔い所と
みんな一緒だったら
それは愛

三行

成功―平凡
失敗―主題
破綻―強調

意識

ひとつのものを失った時
しっかりとあなたの囲りを見て
ごらんなさい
新しい何か別のひとつのものを
与えられている

「対掌性」を認識した古代の日本人！

左巻きと右巻きの縄文を土器の装飾として配置した・・・

日本人のルーツは・・・

日本列島が大陸から切り離され、人類を含む動物は、独自の進化過程に入ったとされる（何万年か前?）。また、日本人は、遺伝子による推定では、日本列島で誕生したという。

そこで暮らす人々の知的な活動は、石器を道具として使い、狩猟で獲物を得る仕事から始まった。やがて、地球規模の温暖化に向かうと、日本列島には森林が拡大し、クリなどの果実が採れるようになる。

それまで移動を繰り返していた古代人は、住居をつくって定住化するようになる。列島の全域で発掘調査が進むと、各地で多数の住居跡が発見された。地面を掘ってつくられた「竪穴住居」と呼ばれ、そこには「土器」などが埋蔵されていた。

日本人は土器を創作した・・・

「土器」は食料を煮炊きするために、粘土を捏ねて筒状の形に成形したのち素焼きで作られ、その表面は多様な文様（図柄）で装飾された。主に、植物の茎などで撚った縄が使われたので、何時しか、「縄文土器」と呼ばれるようになる。

日本列島で縄文土器が使われた時代は、約一万五千年前（紀元前百三十一世紀ころ）に遡る。以後、驚くべきことに、ほぼ、二千三百年前（紀元前四世紀ころ）にかけて、古代人（「縄文人」）は日本列島で活動した。

世界的な視野において、煮炊きができる、「縄文土器」に類いする土器は発見されていない。そこで、「縄文土器」は、日本の古代人の創作といっても差し支えは無い。

奥東京湾の形成

約六千年前をピークとして、温暖化に伴う海水面上昇が起こる。これを「**縄文海進**」と言う。関東平野では、東京湾の水位は上昇し、埼玉県東部から栃木県南端にまで拡大して、「奥東京湾」（古東京湾とも）や、鹿島灘から霞ヶ浦を経て西進した「古鬼怒湾」などが形成され、九十九里浜は水没した。東京湾は北方に向かって侵入し、さらに二つに分岐して、一方は、武蔵野台地の縁辺に沿い、現・川越市に向かうが、もう一方は、現・さいたま市を越えて、大宮台地の縁辺に迫り、現・蓮田市に向かう。

住居跡と「貝塚」の発掘

分岐して侵入した奥東京湾の沿岸には、多くの古代人が定住し始める。このことは、発掘調査によって、住居跡や、食料だった貝類の捨て場だった、多数の「貝塚」によって証明された。

「羽状縄文土器」の発見・・・

今から五千年前のことになる。「縄文時代前期」とされる貝塚から、のちに「羽状縄文」と呼ばれるようになった文様をもつ土器が発掘された。

羽状縄文とは・・・

土器に施された縄文の一種で、矢羽状の装飾（図柄、様式）をもつ。

矢羽は矢に取り付けられる羽で、一本の矢に使う羽は裏表に揃えられる（下の図）。そこで、弓道では、時計回りに回転して進む甲矢と、その逆の乙矢との一対が使われる。

羽状縄文の土器類の文様は、右と左に捻って撚られた二本の縄（原体）を交互に回転して施紋する方法で作り出される。縄は、矢羽のように、時計回りと反時計回りの双方に捩じられている。

現代では広く使われる「右ネジ」に対して、ほとんど使用されない「左ネジ」（逆ネジ）形式が、双方、ほぼ対等に関係で取り入れられていることに注目したい。

「対掌性」とは・・・

右と左の掌の関係をいい、生命科学、物資科学ほかで、極めて重要な分野を担っている。

例えば、生体の成分として重要なタンパク質を構成するアミノ酸、遺伝子を構成する核酸は、「対掌性」をもつ分子群で、化学、生物学の研究では避けて通ることができない概念である。

化学の分野では、「キラリティ」chiralityという。三次元の図形や物体や現象が、その鏡像と重ね合わすことができない性質として、今日では、広い分野で、この用語が使われるようになっている。

「キラリティ」をもつ性質をキラル（chiral）というが、英語風の発音でカイラリティ、カイラルとも読み、ギリシャ語で「手」を意味するχειρ（cheir）が語源とされている。一方、キラリティが無い、鏡像と重ね合わせられることをアキラル（achiral）という。

「対掌性」は、左右の掌の対を意味しているが、「対称性」と紛らわしい。「キラリティ」は、「鏡像対称性の欠如」であり、逆の意味になることに注意しなければならない。

羽状縄文系土器の文様はキラリティをもち、「対掌性」の認識は、古代と現代を繋いでいる。

「羽状縄文土器」は、制作するとき、胎土（原材料の土）の中に植物の繊維を混入させた繊維土器としても知られる。繊維土器は、縄文時代早期及び前期の土器に顕著に見られるが、土器の焼成が一般に不十分で、表面の繊維が抜け落ち、細かい溝となったものが多い。但し、内部の繊維は炭化して残存し、断面は表面の白っぽい部分に挟まれて漆黒色に見える。主としてイネ科の葉や茎のような繊維質の植物の繊維をよく精製したものを使用したと考えられており、壁土に混ぜるような粗い茎や草をそのまま使用したものではない。土器の底部以外では、繊維は横に走っていることが多いが、これは、土器を粘土紐の輪積みによって制作するため、予め粘土紐を引き延ばす工程で、引き延ばされた粘土ひもに伴って、混入された繊維が横に走るようになったものと推察される。

繊維を混ぜたのは、粘土の粘性を抑え、乾燥の際の亀裂を防ぐためと考えられ、関東地方では、早期中葉の田戸上層式から繊維土器が現れ、前期中葉の黒浜式を最後に消失した。

縄文土器は装飾的に・・・

繊維土器を制作するために、繊維を粘土によくなじませて締まった胎土にするために、様々な縄文が発達した。例えば、関東地方では、花積下層式、関山式、黒浜式に、羽状縄文を初め、コンパス文、ループ文などの縄文が隙間なく器面に施された。

「関山関山土器」と「黒浜土器」

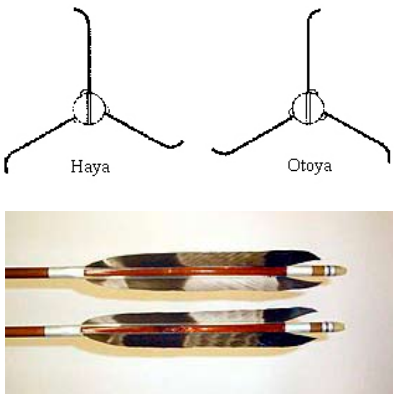
関山式の縄文原体は、複節、複々節といった複数回にわたって撚った非常に複雑な縄であることが知られている。東北地方では、円筒下層式土器に羽状縄文が発達し、北海道南部では円筒下層式の系譜をひく土器群が製作された。北海道中部から道東地方にかけては、北筒式という独特な繊維土器が作られた。関山式土器は、縄文前期、約6,500年前のもとされ、奥東京湾に沿った埼玉県蓮田市の関山で発掘された。

また、「黒浜貝塚」も、蓮田市に所在する。大宮台地の縁辺に立地する縄文時代前期から中期とされる群小貝塚である。ここから発掘された「黒浜式土器」は、胎土に多量の繊維を含んでいて、繊維は焼成によって炭化し、断面は漆黒色で、この時期特有の「羽状縄文」が特徴的である。

右撚り（Z撚り）の撚り紐を縦において、横方向に転がすと左上がり右下がりで縄目が平行に並び、左撚り（S撚り）の撚り紐を同時に、縦において横方向に転がすと右上がり左下がりで縄目が平行に並ぶ。これを同時に施文したり、順番に分けて鳥の羽のように縄文を器面に施文する技法が使われた。

蓮田市内の貝塚群は・・・

埼玉県の東中央に位置する「蓮田市」は、市内中央を南東方向に向かう「蓮田台地」と、その東部に並ぶ「黒浜台地」を占め、「大宮台地」の一部を形成している。また、その間を流れる元荒川及び西の境を流れる綾瀬川周辺の低地を含み、JR東北本線（宇都宮線）



矢羽（鷲）
左が甲矢（はや）、右が乙矢（おとや）
下が甲矢、上が乙矢

弓矢と矢羽の話し

矢羽は、矢に取り付けられている羽のこと。単に羽と呼ばれることもある。鷲、鷹、白鳥、七面鳥、鶏、鴨など様々な種類の鳥の羽が使用されるが、特に鷲や鷹といった猛禽類の羽は最上品として珍重され、中近世には武士間の贈答品にもなっている。使用される部位も手羽から尾羽まで幅広いが、尾羽の一番外側（石打とよばれる）が最も丈夫で、また希少価値も高いため珍重される。

鳥の羽は反りの向きで表裏があり、これを半分に割いて使用し、一本の矢に使う羽は裏表を同じに揃えられるため、矢には二種類できる。矢が前進したときに時計回りに回転するのが甲矢（はや、早矢・兄矢とも書く）であり、逆が乙矢（おとや、弟矢とも書く）である。甲矢と乙矢あわせて一対で「一手」といい、射るときは甲矢から射る。

甲矢と乙矢

矢羽は、矧と呼ばれる糸で箆に固定されている。このうち鏃側の矧を本矧、筈側の矧を末矧という。ここから矢を作ることを「（矢を）矧ぐ」という。

矢羽の数によっていくつか種類があり、二枚羽は原始的な羽数で軌道が安定しにくいが、儀式用として儀仗に用いられることとなった。飛ぶ軌道の安定性を得るため四枚羽となったが矢が回転せず、三枚羽として矢を回転させ鏃で的となる対象物をえぐり取り殺傷力が強化された。

現在競技で用いられている矢は、すべて三枚羽のものである。羽にもすべて名前が付けられている。

走羽
矢を弦に番えたとき、上側で垂直になる羽。

頬摺羽
矢を弦に番えたとき、手前下側にくる羽。矢を引いてきたとき、頬に触れるためこう呼ぶ。また、弓摺羽ともいわれる。

外掛羽
矢を弦に番えたとき、向こう側の下にくる羽。

奥東京湾と貝塚の分布

及び東北自動車道が市内を縦断している。

縄文時代前期（約6千年前）には、すでに述べたように、温暖化によって東京湾が北上し、「奥東京湾」を形成しており、蓮田市の遺跡群はその湾岸に迫っていた。

西側では、「関山貝塚」が発掘され、また、東側からは、「黒浜貝塚」が発見され、これらの貝塚群から出土した土器は、それぞれ「関山式土器」と「黒浜式土器」と呼ばれる。考古学で、これらの遺跡は、「標識遺跡」として、また、発掘された土器は、「標識土器」として指定された。そこで、これらの遺跡、土器類は、縄文時代の遺跡の年代を知るための基礎資料となっている。

花積下層式土器は・・・

奥東京湾を隔て、蓮田市の対岸に所在する春日部市に所在する「花積貝塚」から出土した土器で、「関山式土器」に先行する型式と推定されている。

胎土に繊維を多量に含み、撚りの異なる原体を結束した「羽状縄紋土器」が発掘された。

花積という地名のハナは塙の類語で台地のこと、スミは住むの意であるという。縄文時代から住むのに好適な台地だったことを、この地名は表している。

螺旋は、「ばね」、円い柱の軸方向に進みながら、これに巻きつく形状であるが、巻き方に二種類がある（図2）。

Z撚り（ゼットより、Z縒りとも）、S撚り（エスより、S縒りとも）

Z巻き（ゼットまき、Z捲きとも）、S巻き（エスまき、S捲きとも）が使われる。

一方、右手と左手、右ねじと左ねじで区別することもあるが、曖昧で、混乱が起こりがちである。

右巻き、左巻き

右巻き、左巻きとは、巻き方、正確には「巻きの方向が右か左か」を表わすが、この直観的な定義は曖昧さを含み、混乱の元となっている。

渦巻きは平面の中の巻きで、時計回りと反時計回りとがある（図1）。

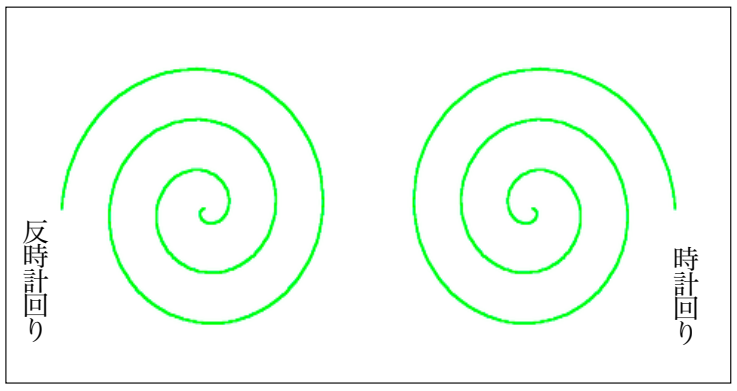


図1

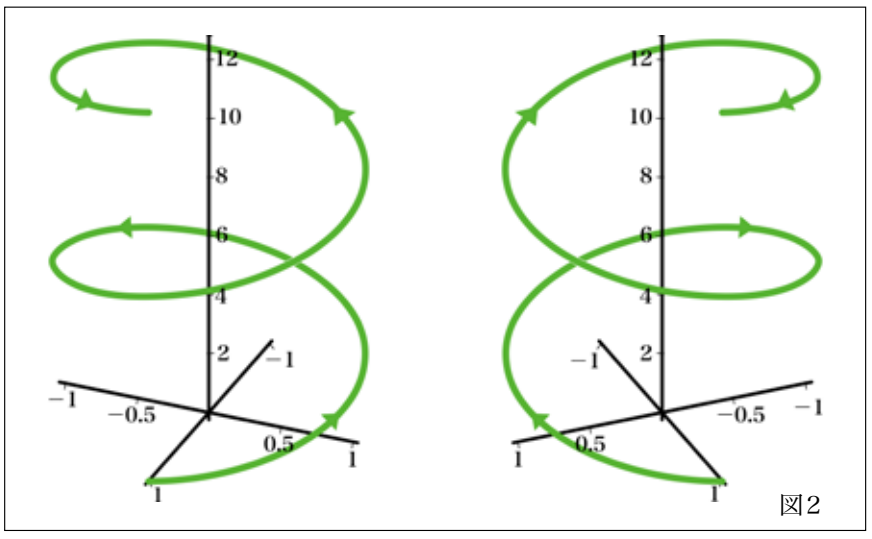


図2

捻って撚られた二本の原縄・・・

藁（アサ、シュロの毛など、植物の繊維を撚り合わせる）

さらに「撚りあわせる」か、

ひねる【捻る・拈る・撚ると・・・】

↓

縄（細長い）

↓

綱（太くて長い）

「糸」の素材は繊維

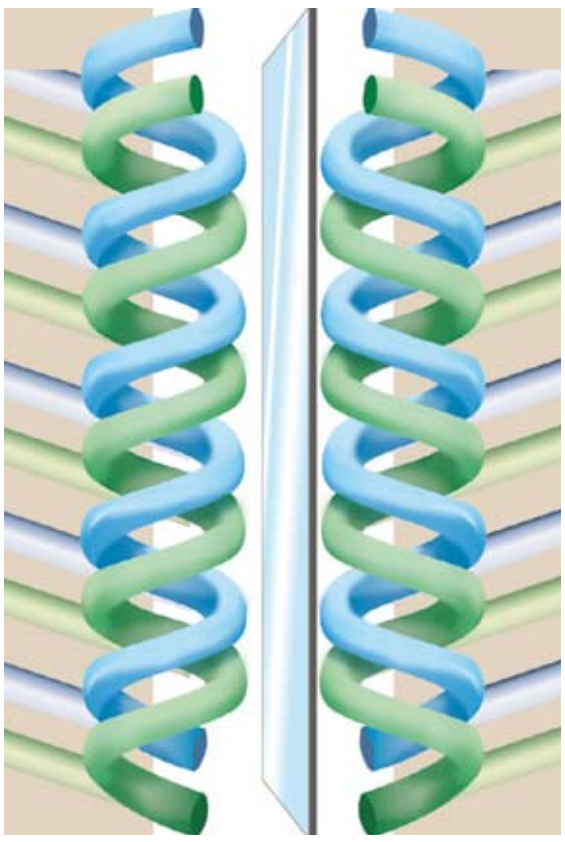
↓

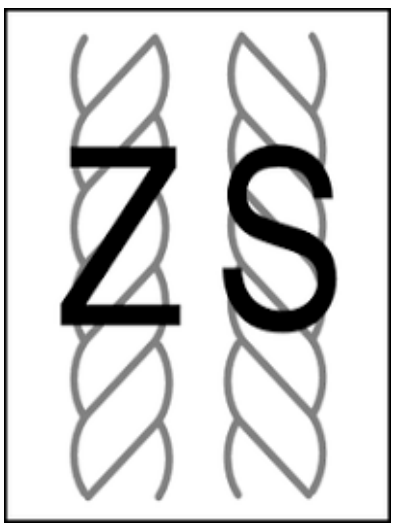
中程度の太さに束ねる、と紐に

天然繊維（植物、動物、鉱物）

に対して

化学繊維（化学プロセスで製造される繊維の総称、ポリアミド、ポリエステル、など）





上の絵は
二本の紐のモデル
S撚り　Z撚り

黒浜式土器

縄文前期の代表遺跡として知られる「黒浜貝塚」で発掘された深鉢型の羽状縄文系土器

高さ45.6㎝、胴回りは、上から口径40.5㎝、頚部径28.0㎝、底径　11.5㎝

埼玉県蓮田市所蔵

（「文化財資料館」に展示中）

左右の縄紋が交差した・・・

「羽状縄紋土器」特有の文様

縄文前期の代表遺跡として知られる「幸田貝塚」で発掘された深鉢型の羽状縄文系関山式土器

（松戸市立博物館蔵）

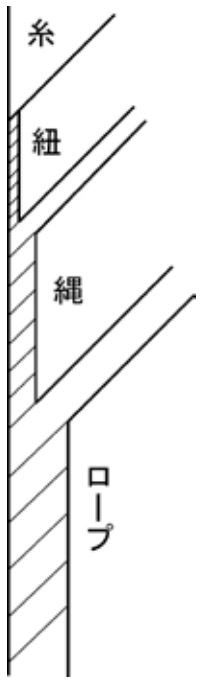
縄文時代とは、縄を押しつけて文様とした土器が発掘されたことによる。また、日本は世界で最も古い土器が発見された地域とされている。

「なわ」はこの時代を象徴する重要な考古学的対象物であり、「なわ」自体は腐って残っていなくても、当時の人の生活を知るキーの一つには違いないと思われる。

ものを結んだり、束ねたりするために、絹や毛、麻や木綿、化学繊維、紙、革などを組み、あるいは編み、縫い合せた細長いものは「紐」といわれ、紐より細い細い糸は、天然維および化学繊維を引き揃えて、撚りをかけた物のことである。この工業的に撚りをかけたもののことを専門的には撚糸という。

また、クモの糸のように、紡績とは無関係な長細い形状の物も含めて糸と呼ぶ。

一方、「ロープ」は、紐や針金などの細長い繊維または素線を縒り合わせたもので、牽引などを目的とするときには「綱」ともいい、縛るためのロープは縄ともいう。また、ザイルはドイツ語で「綱」を意味、英語のロープと同義語である。



上の絵は、
縄文土器の文様のモデル
中央に鏡を置き、左右には、二本の茎（又は藁）を、それぞれ左と右とに捻じった鏡像体の紐（又は縄）とそれらを、粘土面に押しつけた土器面の文様を示した

「市民フォーラム」の活動

「市民フォーラム」は、地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によって市民の公共参加を推進します。また市民間のコミュニケーションの増進に努めます。

読者の「オピニオン」（意見・感想）をお寄せ下さい。

TEL　090（3048）5502

編集部原宛にどうぞ

本紙「市民プレス」は年四回（一、四、七、十月、各五日）発行。